

★6月2・3・4日 吉野→山上ヶ岳→吉野 二蔵小屋にて2泊 女人結界の場所につき男3名 岡村・福田・衣川。

★近鉄：阿部野橋駅構内のコンビニで、夜の弁当といくつかの食料を追加して、6：30発の吉野行き急行に乗った。1時間40分の長旅、昨夜の睡眠時間不足で寝いった。朝は4時起床と驚異の時間、驚異などと言っているのはオレだけで、あとの御仁はそれが平生だそうだ。4時の起床は5：18分の始発に乗るためだ。早朝に起床することが、修行のひとつだそうだが、修行が行き届いているオレにとっては、つらい話である。それに加えて寝入りばなに風が吹いた、今まで感じたことのないような突風の強さ、「これは強い 台風よりきつい 大丈夫かな」というものだった。

★9：30吉野駅を出発、登山の始まりだ。ここから奥千本までは有名な観光地、門前町、社寺、土産物屋が並んでいる。「桜の最盛期に やってきたが まるで 梅田の繁華街を 歩いているようだった」「この山 帰りは 日曜日なので人が多いと いやだねえ」と話していた。帰途の話だけれど、晴れた日曜日の昼ごろでも人はまばら。この街の観光集客、他の有名なところに比べて低いのか、桜のシーズン以外はこの程度なのかもしれない。山の上から街並みを見ると、建物の数も少ない、道路の左右に店が並ぶだけ、繁華な様子だけれど、横道はないようだ。

★山の中は、吉野杉といわれる杉の植林、檜もある。ここの杉はブランド物として古くから有名で、にわか針葉樹の植林が盛んになったのではないらしい。日本酒の樽の材料はこれかな。

★桜で有名な吉野とはいえ、後日にこれを書いていながら、観光客を呼べるのは桜だけなのでは、とも思っている。電車を降り奥千本にある金峯神社までの二時間、重い荷を担ぎ、土産物屋街を通ると、あちらこちらに歴史看板がある。後醍醐天皇、西行、義経と有名人の名前が出てくる。帰って調べてみようと思った。

★「吉野は 中央で 居場所を失った アウトサイダー達が 再起を 図る場所 だったのでしょか」と出ている。
◎壬申の乱：天智天皇<中大兄皇子>：弟大海人皇子とともに大化の改新で活躍した>の子<大友皇子>と弟<大海人皇子>の皇位継承争い。天智は子の大友皇子を後継者とした。弟、大海人皇子は吉野に隠棲した。天智の死後内戦が始まり、大友皇子が亡くなり、大海人皇子が天武天皇になった。

◎源義経が兄頼朝の追補を逃れ、静や弁慶を伴って吉野まで逃れてきた。ここで静と離別になった場所だそうだ。

◎鎌倉幕府が倒れると後醍醐天皇ら貴族たちが「建武の新政」を行ったが、これに対立した足利尊氏を中心とした武家たちが、天皇家から新たな天皇を立て室町幕府をひらいた。後醍醐天皇は吉野に逃れ“南朝”をひらいた。

◎大阪の豪商が桜苗を寄進、それ以来、桜植樹が盛んになった。

◎秀吉が家来五千人を引き連れ、花見大会を催したとか。

◎西行：北面の武士（清盛と同期）妻子別れ、22歳で出家。伝記が残っている、有名人であったようだ。

花に染む 心のいかで 残りけん 棄て果てて きと思ふ わが身に : 吉野の桜を愛で歌う。

よしや君 昔の玉の 床とても かからむ後は 何にかはせん : 崇徳天皇の墓で、死後は誰も平等ですぞ・・・。

◎芭蕉：

年たけてまた越ゆべしと思いきや命なりけり小夜の中山 : 西行翁が東北に向かう、再び東北に向かう私だ。

命なりわずかの笠の下涼み : 芭蕉の句。西行翁が詠むように、佐夜を超えるのは大変だ。

きぬた打ちてわれに聞かせよ坊が妻 : 吉野の秋、冷えてきた夜 僧房でその音が聞きたい。

新古今集：み吉野の 山の秋風 さ夜ふけて ふるさと寒く 衣打つなり : 藤原雅経作をうけて。

「一人で吉野の奥を辿っていくと、実に山は深く、白い雲が峰々を覆い、谷を煙のように降る雨が谷を埋めるように降っている。山に暮らす者たちの家は山の所々に点在し、西からは木を伐採する音が東に木霊して響いてくる。寺院の鐘の音もまた人の声のようにわが心の奥を揺さぶるのだ。昔からこの山に入りて、浮世を忘れたる人のなんと多いことか。その多くは詩作に逃れ、歌に隠れてこの山に隠棲したのである。

★吉野の街中を歩いているとみなさんが声をかけてくれる。「雨じゃなくてよかったね」「昨日の突風 大雨が上がって よかったね」「山上ヶ岳まで そらあ ごくろうさん」六月に入ったばかりのまわりの山は、青々とこれから緑が生い茂る勢いを見せている、緑の木々には葉とは見まがうように静かな花が咲いている。世尊時跡の看板に「平清盛の父が 寄進した・・・」というような文章、どんどん有名人が出てくるねえ。

★金峯神社に義経のことが書いてある。少し上に西行の庵があったとか、ここからいよいよ登山道に入る。このあたり杉林を伐採して桜の木を植える作業をしている。もともと吉野は杉の産地だったそうだが、50年60年前に国策で杉や檜の植林がなされ、見渡す限りの針葉樹林帯になっている。外国産の木々に押され価値の下がった杉や檜、「悪いのはお前らじゃないよ」といいつつ、いよいよ杉林の中の登山道に入っていく。

★普通の天気予報では、今日・明日・明後日は、おひさまマークになっていた、何日か前までは今日の天気は雨だったが、二日前ぐらいから“傘マーク”が消え“おひさまマーク”になった、これは助かった。ただ山専門の天気予報では、風がきつく登山日和ではないとしてあった。先ほどから日差しがきつく半そでシャツでも汗が出る、涼しい風が吹いてくれるので快適でもある。この風は500Mも登れば冷たい風になるやも、である。三年前の大峰奥駆道7日間の時は、初日に雨が降り雨具を通して身体が濡れ、防水の効いていない靴も水浸し、あとの六日間、濡れた不快な靴、不快な臭いの靴を引っ提げて歩きとおした。本当に今日は雨でなくてよかった、雨はいやだもんね。

★やっと登山道だと荷を担いで登って下ると、なんと先ほどの林道に出た。“林道吉野大峰線”と書いてある。大峰奥駆道は長い歴史がある、崖崩れや崩落で何度も道が付け替えられたのだと思われる。地図にも“古道”や“在来道”また“迂回路”や“通行禁止”と色々出ている。大雨の多い山間部、村全部が消滅したというような大きな災害も過去にある、登山道が崩れることぐらいは毎度のことで、その都度、みなさんの労働奉仕で修復し、梯子や鎖がつけられ、歩けるようになっていく。そんなに雨の多い山だが、山の中では水に苦勞する。水場の情報をあらゆるところから調べるが、いつでも豊富に水がありますよ、おいしい水がどんどん湧き出ていますよ、というところが少ない。今回も、吉野と山上が岳の間で、「水が得られるかどうか わからない」という情けない話だったので、ひとり4L、きれいな水を吉野駅から担いで登った。

★林道を歩いていると、黒滝村や川上村の標識がある。「昔 ひょっとしたら ここを車で 走ったことが あったかな」と思いながら、この山は登山道と林道が平行しているのだとわかってきた。オレは、車が走る山、山に道路が付いている処に行くのはきらいである。六甲山に行かないのは、ふうふう言って登ると、てっぺんを車が走り回り、きれいな男女がうろうろするのが、きらいである。

★四寸岩山<しすん>と読む。頂上には白い大きな岩があったそうだが、現在は沈んだのか、砕けたのか、白い石ころがちよっとあるだけ。「今は 墓場に向かって 重荷を背負って 歩いている」なんと独り言にしては、名言なり、妄言なり。「オレはまだまだ 楽しみもあるよ そらあ 老いもあるけど」「そう なるようにしかならないよ どうにでもなれだよ 気にしないよ」人それぞれ、六十歳代、七十歳代を楽しんでいる、元気に山を歩いているのだ。

★登りがきつい、荷が食い込む、「ひーひー はーはー」急斜面を登っていく。登山道に添ってレールが敷かれている。レールといってもモノレール式の一本レール、これの呼び名はなんというのか、調べたがわからない。ここのは、何に使うのかもわからない、高齢の修験者でも送り迎えをするのかな。あちこちで見かけるこれは、人を5人ぐらい乗せるとか、農作物を乗せるとか、軽い工事機材を乗せているようだ。30分ほどで一つのピーク、今回の地図、コースタイムが出ていないのでここが頂上だと思ったらもう少し先だった。杉が、広葉樹が、風で揺れている。

★ピークだと思ったらところからまだ30分ぐらい登ったところに、ほんもののピークがあった。西側の見晴らしがいい、「やまやまやま ぼこぼこぼこ 四国に比べ少し低いが 山ばかりの国 木ばかりの里 鉄塔が見える 林道が見える 建物が見える 緑が今まさに 日々濃くなろうとしている 大汗をかいた ほてった身体に涼しい風 晴れてはいるが 雲もある 降りそうな気配はないけれど 風がはしる」

★さあ今日はこれが最後の下り、下れば今宵の宿、2時かな3時かな、わからない。いつも時計をしていたのだが、半年前に時計バンドが切れ、それを機に時計をしなくなった、「いま何時」と聞くこともあるが、「なんどきでもいいや」とも思うようになった。陽が落ち始めると標高が1000Mを超えるこの辺りは、さすがに涼しい。大阪では半そでシャツで、「暑いねえ まだ この季節なのに」と言っていたが、長そでシャツをもう一枚着なくてはいけない涼しさだ。ブナが多くなってきた、ブナは好きな木だ、ここらあたりのブナはまだまだ若い、人の胴体より太いぐらいの木々が群がっている。ブナの幹は、白丸、グレー丸、緑グレー丸、緑の苔、独特の風貌である。

★歩いていると“足摺の宿”というきれいな小屋がある。扉を開けて中に入ると、ここは礼拝のための小屋、休憩や寝泊まりの小屋ではない。この登山道には、礼拝のための小屋、小さな祠、大きな銅像がいくつもある。天を舞っていた役行者は修験者系で呪術系、仏教系の釈迦、菩薩、明王、道教系、神道系と色々ありだというのが、詳しくなくて失礼。土の上にはたき火の跡、護摩供養の跡、木簡が散らばっている、ローソクが立ててある、鉦がある。

★ピークから200Mぐらい下った、穏やかな夕方の陽の光、風も収まってきた。もうすぐ林道と交差するだろう、歩いている時は知らなかったが、帰って調べると、ピークを登る登山道歩きと、舗装林道歩きは、同じく一時間半だそう。だ。「おお 立派なブナが たくさんで来た 気持ちがいい」

★二つの道が交差するところ、広々草が生えている。「ふお ふお ふお」フクロウの声。「西の方は 山 山 山 東の方は樹々で見えない」「明日は 400Mの登り 200Mの下り 500Mの登りだぞ」「なにあに 空荷だ 大丈夫」

★「小屋はすぐだ すぐそこだ」これが勘違いだった。「まさか道を間違えた まさか小屋が無くなった」10分も歩いた、たった10分ではあるが、すぐそこと思っている気持ちにはズシリ重い10分だった。

★小屋で荷を下ろし、「水を探しに行こう」と歩き出した。3本の道があり、上は古道の大天井岳へ、中は在来道の谷筋道だが、崩れているとの情報で、3年前は林道を五番関まで歩いた。下は水場10分と書かれ、小屋にいた人が汲んでいた。中の道を進んだ、30分ぐらいで崖が修復されていること、水があること、それらを確認して引き返した。その前にオレは、すごいもの発見、写真を撮った。斜面の上に黒い縫いぐるみのようなものがじっとしている、まったく動かないが動物のようだ、耳が立っている。あれは、カモシカかと思うが、「どなたか いたずらに オオカミの縫いぐるみでも 置いているのか」「まさかこんな山奥で いたずらでもあるまい・・・」首を傾げながら家に帰って写真を見ると、ほんまものカモシカが写っている、彼は動かないのだねえ、置物のように。

★朝5時、不思議な色の朝陽、赤い、杉の樹林を抜けてこちらに斑の赤、小屋に木の幹に赤い光、そんな光もすぐに消えて、長くは続かなかった。二蔵の小屋は昔、「百丁茶屋」だったそう、どこから数えて百丁なのかな。間伐材の丸太造り、丁寧に作ってある、まわりに雨水を貯めているが、飲めない汚さ。

★今宵の晩餐は、近鉄阿部野橋駅で買った弁当、「修行なので 酒など とんでもない」という御仁をしり目に、ウイスキーを、泡盛をちびり飲んだ。500CCあればふた晩楽しめると思ったが、とんでもない、すぐになくなった。寝不足でぐっすり眠ったが、夜中「ちりん ちりん」歩く人の話し声を聞いたという。白装束の人かな。

★6:00 大天井岳に向かって歩き始めた。水は帰るまでないということで2L持った、アルファ一米に湯を入れたもの、パンをミニザックに詰めた。

★一つのピークに着いた、家一軒建つぐらいの広場、祠がある、下界は曇って見えない、空は青い。「あれは栗の木かな 葉がギザギザ 房のような花」「おお 柄の木がある 天狗の葉っぱだ」「やあ ブナ君もいるねえ」

★大天井にやってきた、「てっぺんは あちらだから そこで朝飯しましょう」昨日は半そでシャツで歩いていたが、今日は肌寒い、長そでシャツを着て雨具も着てもまだ寒い、「まさかこれ以上寒くはならないでほしい 着るものがないぞ」と思いつつ、アルファ一米にカレー、ふりかけ、塩昆布と粗食、「一週間ぐらい 粗食でも 大丈夫 死にはしない」という御仁、なれど旨いものが食いたいねえ、酒が飲みたいねえ。

★ここ、大峰奥駆道では何か所か、鎖、梯子、岩場がある。オレは、人にはばかることなく「高所恐怖症なんですよ 危険マークが付いた処は 行きません」と公言している。「オレの高所恐怖症は 掴む 握る 抱かえる そんなものがあれば 怖くない」「鎖・梯子・手で掴む所があれば 怖くない 掴む所のない斜面が 岩場が 怖い」帰る途中のずるずる砂利崩れ、なにも掴むところが無いところ、あそこは嫌でしたねえ。

★東の方が見通せる乗越があった。ソーメンの升屋がある東吉野村、ゆっくり見るのだった。

★五番関にやってきた、女人結界門がある、ここから山上ヶ岳までは、いまだに女人禁制の場所だ。

★看板がある。なぜ結界なのか、なぜ女人がだめなのか、ご理解くださいという文言。本山は、役行者によって始まり、千三百年の長い間、多くの宗教者、先達が、修行の根本道場として、修行者の聖地として、女人結界を守ってきたことをご理解ください、と書いてある。明治政府による「修験道禁止」の法難を経て今なお盛ん、とも書いてある。

★鍋冠行者堂：中華鍋が祠の前に吊ってある。菩薩が修行中に大蛇が現れ、口から火を噴き火の玉となって襲ってきた。行者は携行していた鍋をかぶり火の玉の難を逃れ、呪術で大蛇を退治した。日本霊異記が読みたくなるねえ。

★原生林の中、てっぺんが近づいてきた、木々が右に左に、枝を、葉を広げている、温かくなってきた。ほら貝の音が響く、天狗が走り回っている、高下駄と杖が見える、天女が、美少年が横切る、雲の間に、龍や大蛇が蠢く。

★昭和18年2月、遭難の石碑。宗教関係ばかりの石の中に珍しい。2月に遭難、雪の中だもんね、若者かな。

★洞辻茶屋、アーケードの中に売店が数件、ここは三差路、洞川からここに登れる。オレ、昔、冬に何度か来たねえ。

★山上が岳の直下、このあたりは岩ゴロゴロ、「昔は すいすい 歩いていたが こんなに 歩きにくい ところだとは ふらつくね 足が上がらないね 年だねえ」とぼやきながら着いた。「でっかいお堂 こんな大きな 建造物をいつ誰が」と調べ、今やっと納得した。元来は役小角<神変大菩薩>が大峰山脈全体を修行道場とした。山上が岳にお堂を、吉野にもお堂を、その他にもお堂や祠があり、それらを含めて一つの修行道場であつたらしい。現在は、吉野は金峯山蔵王堂という名に、山上が岳は大峯山寺という名になっているが、元来はひとつのものだつたらしい。お堂から少し上は見晴らしのいい笹の庭、ぐるりと回りが見える、気持ちがいいところだ、ここは気持ちがいいよ。

★今宵の宿、二蔵の小屋への帰途についた、小屋まで4時間ぐらいか、ザックには少しの水とパンしか残っていない。人のいる小屋が無いこの山、水と食料が必需品ながら、荷が重い、担げない、旨いものを持ってこれない、「今はもう旨いものはない 酒もない 水は小屋の近くで汲めるが・・・」とぼやきながら自然林の森の中を楽しく歩いている。

★五番関から、朝の道ではなく昨日調べた谷筋の道に行く。「崩落のため通行できません」と書いてあるが。

★小屋の手前30分ぐらいに水場がある、水場といっても細い水脈がちょろちょろ流れている。「旨い」と叫びながら飲み、4Lもザックに汲んだ。すこし前に“川上村村営ホテル・ヤマメ釣りこちら”の道しるべ、こんなところから行く人もいるのだねえ。下に林道が見える、3年前はあそこを通過して五番関まで行った。考えるに、雨の多いこの辺り、溪谷がたくさんあるのに涸れている。山がほとんど杉ばかり、落ち葉や草が無くなり、保水力がないのでは・・・。

★翌朝、さあいよいよ帰ろうと、二蔵の小屋を出た。二晩お世話になった、ありがとうございます。小屋には毛布が置いてあった、シラフの下に毛布を敷けば暖かい。オレのシラフは古びているが900Gの立派なダウン、今の季節は暖かく快適に眠れた、二晩とも、ゆったり、目も覚めずに眠れた。

★歩き出した、ザックの体積は変わらないが、米、おかず、水、お神酒、重いものが減っている、軽くなっている。

★朝飯は四寸岩山で食った。朝に湯を入れたアルファ一米、ふりかけ、ひじきのおかず。主食さえあれば、リキは出る、荷を担いで歩けるものだ、昨日汲んだ川の水を飲み、旨かったと立ち上がった。相変わらずここからの景色は素晴らしい、黒滝村方面が見える、木々の緑が、青空が目飛び込んでくる。

★鳥の音がすごい。キャキャキャ ポッポッポッ ホウホウホウ カッカッカッ 君らの姿が見たいねえ。

★いったん林道に出る、“林道吉野大峰線”と書いてある。自転車の連中が「ヒーヒー」登ってくる。かってオレ、北海道の車道を自転車で行くと、アウトドア連中の仲間意識なのか、挨拶なのか、単車の連中が手を挙げてくれた。ここでも、大きなザックを背負ったやつ、自転車ヤローズ、ランニング連中、と会った。今回の山、奥千本から五番関まではほとんど人に会わず、吉野と山上が岳では、たくさんの方がいた。吉野より山上が岳の方が多かったかな、土産物屋さんがいっぱい。思い出すのは石鎚山の挨拶「おくだりさん おのぼりさん」だったが、ここ山上が岳では、みなさんのぼりも下りも「よう おまいり～」であった。

★まもなく登山道が終わるというあたりまで降りてきたが、横の谷を覗くと、谷底は深い、まだまだ山の中である。千年も前の時代に、奈良や京都の貴族や裕福な人たちが、こんな奥深い山の中までよく来たものだ。

★登山道が終わったあたり、杉の木を伐採している、はげ山に桜の苗木を植えている、ブルトーザーが斜面を削り、道をつけている。現代の土木技術ではこんなひと山、簡単に掘り返せるようだ。

★どンドン山から降りてきた、まだ昼の光が眩しい、吉野は大観光地、日曜日の昼間は人だらけだろう、そう想像していたがほとんど人はいない。葛の店、和紙の店、温泉旅館、土産物屋も人は少ない、吉野が光るのは、桜の時だけのようだ。温泉旅館で1000円の風呂に入り、十三駅で居酒屋に入る。お二人様ありがとうございます。

この一週間“額を作る”“木工を習う”ということで気持ちが額にシフトしっぱなしである。ふた月前のシエスタ展覧会で会ったSさんが「これ 手造りの 額ですか」「へたでしょう」「実は わたし 木工教室に通ってます」「紹介してください」そんな話から、まずは見学に行った。85歳の元建具屋さんが主催する教室、そこに80歳の木工好きの方ら2,3人集まり、木工教室を開いておられる。素人先生、「額なら 機械を使わず ノコギリを使って 造りましょう 月に一回です 4回もやれば コツがつかめるでしょう」ということで楽しみにしていた。「材木を 持ってきて」といわれていたが、なにを持参すればいいのやら、自転車で門真のほうまで行かねば、と思案しながらも当日は弁当にお茶を用意し自転車に乗った。安物の松の一寸角材を6号4本分が作れる大きさに切って持参した。

「実は OOさん 階段から落ちて 意識不明 そんなわけで わしが 木を切ったげる」86歳の高齢、歩行もままならず、階段はいす式エレベーター、フーフー言いながらもひとたび材木を握るとプロに戻る。書いていった図面を見て、いくつかの質問、「よし わかった 面とる?」「とらない」「よし」こういう会話で話が早い。建具用語で、つら面をくみつけ>側面をくみこみ>直角部分に入れる細い木をくちぎり>というような単語を覚えた。

ながめに切った材木を、板にパンパンと叩きつける。「この音で ゆがみが わかる」なるほど 普通にパンパンと叩く音ながら、ちょっと濁っている、鮮やかだ、クリヤーだ、てなことでゆがみを図るのだという。カンナをかける、カンナ屑がくるくる巻上がる、カナ尺で測る、また削る、測る、叩く、削る、まずはまっすぐな棒が出来上がった。「みつけは みこみは」と寸法の確認。「このノコには 近づかんよう」ぶいーんと歯が回り始める、寸法通りの角材がすぐにカットされる。「電動ノコは 使わない方がいい 怪我でもしたら 取り返しがつかない」次に「材木の寸寸と外寸は」電動ノコで、45度にカットするには、外寸がいるようだ。すべての材木に印をつけ、電動ノコの卓上に45度用ガイドを付け、ぶいーんと歯が回りスイスイとカット。この4本の木を 糊付けし ひもで縛って 額の四角を作る。「きちんと切れているから 45度や ま四角の検査はいらない」という。これにはびっくり、「順序通りに仕事が仕上がっているのだから 狂いはない まったくま四角だ」長年の職人の自信だ。のりはボンドだけど、「ブラシで ごしごしよく洗う ボンドが残ると あとでよくない」「後日 糊が乾いたら ちぎり いれましょう」

三日後また寝屋川まで行った。東京に送る<140X70cm>額もお願いした。自転車で材木が括りつけられるか、前日に試してみた、少し走ってみた、問題なしということで、同じように朝9時に出発。図面を見せ、「前と同じやな」ということで材木の飽かけ、叩く、かな尺、と少し長い四角の材木ができあがっていく。「今日は ちぎりやのうて あんたがひとりで できる方法でやってみる」電動ノコで前回四角に組みあがった額に、ちぎり用の溝を掘る。「歯が 丁度 3ミリ」それで四隅に、ぶいーんと歯が回りスイスイ溝ができる。「あんたは 溝に糊をぬって 用意してある 3ミリの板を 三角に作って 入れていって」

3ミリ厚の板を 溝より少し大きめにノコギリで数だけ作った。電動ノコで開けられた溝にボンドを塗り、板を押し込め、前回同様、はみ出たボンドをごしごし洗う。横で師匠は、材木に45度の線を、ホゾの線を丁寧に入れていく。「二十歳代 三十代には機械がなかったから 全部これでやっていた 組んでいた」という技法、「なんと キャンバスの木枠の 細工じゃないか これはよく知っているが 自分で作れるとは・・・」この組手を手造りとはすごいと思いつつ、オレも作業に励んだ。師匠は、大きい額のホゾに糊を付け、四角が組みあがる。「これだけじゃ弱いから くぎを打つ」ホゾの微妙なところに 釘の頭を5ミリほど入れる大きな穴、その芯にキリで穴を開け、くぎを打ち、タガネで頭を押し込む。まず大きいものはこれで作業が終わり、「糊が乾いたら くぎ隠しを入れとく」次にちぎりの完成作業、出張した木を切り、カンナ仕上げ。「おおお すごい きれい かんぺき」作業途中では「ちょい きたないかな」と思案していた杞憂も吹っ飛び、さすが師匠。帰って我が家の障子を見た。「日本の建具細工はすごいねえ あのほそさ ぴったり決まっている」今回の額、裏ふた、釣り手、色塗り、とオレの作業が待っている。

◎先日来、「比良に行こう」と思っているが、なかなか決心がつかない、今日こそ行かないと週末ぐらいから梅雨前線がやってきそう。弁当、水筒、ザック、靴、ばたばた用意してJR茨木駅へ。北小松駅に着いたのが10:20だった。

◎歩いていると15センチぐらいのトカゲ君、草むらの中ではなかなか観察できないが、舗装の上、上半身は褐色だがシッポの方はコバルト色、しかも全身ラメ入り、お酒落だ。

◎1本目を登っている、暑い、しんどい、電車の冷房がきつすぎないか、登山口に2台の車があった、など色々と頭をめぐらせていたが、そのあとずっと何も思わずに歩いていた、無心に歩いていた、オレは人間ができていて、笑い。

◎駅から1時間で、涼峠にやってきた。いつもここで一本取る。手造りサンドイッチを半分かじる。

◎山の顔が違う、こんなに急だったか、手をつかわなきゃいけないぐらい、こんなに緑が茂っていたか、2本目を歩きながら、首をかしげる。ひとりで山に入ると、詩人になるというけれど、美しい言葉は浮かんでこない。ただいつも、風は気になる、今日は空気の流れはほとんどないが、休むと涼しい風が気持ちいい。樹々が茂っているおかげで、日差しはないが、まわりが見わたせない。見えるのと見えないのではと聞かれると、「そら～ 見渡せるほうが好きだ」

◎涼峠から30分でヤケ山にやってきた。もう30分歩いたら昼過ぎになるので、弁当を考えよう。

◎岩までもう少し、開けて、琵琶湖がよく見えるところで弁当を広げた。いつもの小豆入り玄米に梅干を半分。青野菜と卵を入れ炒め焼いた。旨いねえ。お茶0.5L水1.5L持参した。雪の季節はいつもここら辺りで断念。見ると細い木が地面を横に這っている、冬はよほど風がきつい、よほど雪が深いのか。

◎このあたりのつつじ、幹が1、2本ひょろり、赤い花が二つ三つ付いている、まるで造花の雰囲気だ。

◎梅雨入り宣言のあとも雨はなく、山は乾いている。乾いた砂や砂利は、ずるずる滑るねえ。

◎ヤケオ1:10、シャカ1:45、何度も来ている、シャカまで3時間、ここで弁当、ブナまで行っていた元気だった。今日が出るのが遅かったのと、体力の衰えで、もう北比良から下ろうと弱気になっている。

◎オレは勘違いをしていた、この登りコースで、しんどいのは2本目だ。シャカ直下が、3本目が一番しんどいと思っていたが、すぐに簡単に着いた。雪の頃でも、岩のあたりを通過すれば、シャカまでこられたかも・・・。

◎昔のケーブル駅2:30、建物があつた跡にはまだ緑は生えていないが、土砂崩れがある、地面が削られている。山は人の手が入らないと、10年20年で姿が変わっていく、平野部分も同じかもしれないね。

◎「え この道」「通行止め」「3年で変わったのか」「ええい いけ～」馬鹿なことをした、無理をして行ってしまった、砂利の斜面、踏み跡が続いている、先に道がある、進むのは怖い、まさか下がれない、落ちれば死にはしないが・・・、冷や汗の5分か10分、一回だけズルリがあつた、渡り切った、回り道をするべきだった。

◎下っている、川の音はまだ聞こえてこない、最後の水を飲んだ。ここの下りは、膝のリハビリに最適、トントントン、左右の足を下へ下へ、昔のリズムが蘇える、歩けることがうれしいねえ。「使わにや だめよ 身体は」なるほど。

◎「おっ 水」竹筒から水が流れ出ている。空のボトルに水入れごくごく飲んだ、「旨い」ボトルに水を汲んだ。水は冷たくない。

◎竹筒を見つけるちょっと上で、「ボコボコ」水の音を聞いたような気がしたが、まわりは乾ききっている、くまが喜ぶ鈴の音で耳がおかしくなったのかと思っていたら、竹筒があつた。水が地中を流れる音だったのかもしれない。そこから下はなんだか湿り気が増してきた、川が近のだろう。下山の時、川の音が聞こえだしてから、川まで30分かかる、いつもだいたいそんなものだ。

◎この道、イン谷口から北比良峠、以前に通ったとき、おっさんが一人で道の整備をしていた。仕事が上手い、プロだね、というような人が黙々と仕事をしていた。役所から頼まれたのか、労働奉仕で進んでやっているのかは知らないが、思うに彼は、好きで労働奉仕をしている、何人かが、資金材料を手伝っている、ということかな、感謝である。先ほどの竹筒、石を並べた水路、石の段差、石の道しるべ、石組、太い木で造った崩れの養生・・・きれいな仕事、上手い仕事がずっと続く。

◎川に到着4:00 やっと着いた、もうここからは普通の道を駅まで1時間歩くだけだ。川の水で顔を洗いシャツと靴を替えた、さっぱりした。水は先ほどの湧水より冷たい、まさか雪解け水でもあるまいし、なぜかな。7時帰宅。

なにげなく縄文時代の土偶の写真が載っている本を手にとった。「土偶・コスモス」2012年 MIHO MUSEM と書かれている。「おお あの展覧会」というのは、オレ、5年前この展覧会を見に行っている、その時の展覧会の写真入り解説書だ。中の写真を見ると、次々と土偶たちが現れる、ついでに土器も載っている、パラパラめくりながらあの時の感動が蘇った。

縄文土器のことは以前から知っていた、岡本太郎が「素晴らしい」と言っていたことで人気が急増したとかも知っていた、そのおかげで、“火焰土器”の本物や写真を見る機会が何度かあり、オレ自身もその形にその色に魅了されていた。土器は弥生時代以降になると形や作り方が洗練され、工芸品的できれいなもの、合理的で整ったものになってくる。縄文土器は、見た目、ごつく、おどろおどろしい模様がついている。もしくは、形は不細工、機能的にも扱いにくい、使いにくい、素人細工的なものが多い。その反面、「なんだこれは」と不思議に思う、きらりと光る模様、形、人面やら獣面が付いている。執拗に縄の模様が、ヘラでの削りが、棒で突いた凹部や、掘られた穴部が、丁寧に盛り上がった凸部が、これは何の顔、あれは何の動物、これらの装飾群が上へ下へ、右へ左へ伸びている。これらの、「なんだこれは」という部分にそして全体に驚かされる、感動を呼ぶ、魅了される。

現代のもの造り作家でも、普通に洗練されたきれいなものに飽き足らず、「なんだこれは」という表現をしている方がいくらかおられる。「作品なんて なんでもありだけれど これはねえ ちょっとねえ」と眉をしかめるようなものから、「変わっていて おもしろいかも よくまあこんなことを 思いついたものだ」というのまで様々だが、一概にこんなものはだめだ、よくない、いけない、とは言わない。おおよその流れの中で、一風変わったもの、時代に逆行しているもの、目をむくようなものの中から、次を予感させるものが出てくるかもしれない。「なんだこれは」を NO というのではなく、じっくり見守りたい。

先日、額屋さんが来訪時の話の中で、「白髪一雄と 麻生三郎は 同じような絵」と言っているのを聞いて、驚いた。がそういえば、彼の言うこともまんざら間違っていないかと、同じように薄暗い、汚い絵の具を、キャンバスにこすりつけた、ほおり投げた、なすくった、という意味では同じかなと思った。白髪一雄の抽象表現、「ええい ちちんぷい ぷい」と造りだされた絵画も、麻生三郎が筆で描きなぐった人体表現の絵画も、絵ヅラはパツと見たところ、同じかもしれないねえ。オレが絵の勉強を始めたころ、「すいかを 落として われた模様が 絵 だって」「大きな紙を 張って その中を画家が走り抜ける その敗れた紙が 絵 だって」と世間の人々が笑っていた。もちろんその笑いは、失笑、侮蔑の類で、「世も末だ」とか「これが芸術」「こんなものが 絵画なのか」という本気で怒っている話だった。それらをやっていた具体美術の連中は、至極まじめに、意欲的に、「世の中にない 美術表現を 技術を 感性を」と次々に変わったものが出てきた。半世紀たった今、美大出の描いた絵画も、当時の具体美術の絵画も、同じような表現のものが出てきている。

土偶の存在は知っていたが、当時この展覧会を見ることで、「こんなやつもあったのか こんなにたくさんあったのか」と知らないことがたくさんあったが、改めて魅了された。縄文時代が1万年続いたと簡単にいうが、静かに時間が流れ、誰かが何処かで棲んでいた、暮らしていた。動物と変わらないような穴倉で、草を覆った巣で、獣に昆虫、魚やカエル、葉っぱに果実を食べていた。犬や猫のように子を生み育てていった。罎で寝そべり粘土で形を作ったのが土偶かな。縄文土器や土偶がそれらを作ることを専門にしている誰かによって作られたのか、それとも、だれもかれもが、暇に任せて土をこね形を作って、縄やヘラで模様をつけていったのか、これはわからない。器は生活用具として、ヒトの生活の必需品、食べ物を入れておく、煮炊きをする、食事のワンやコップにも使える。土偶は作って壊され捨てられていたという。発掘現場であちこちに散らばった破片をつなぎ合わせて、やっと見られるようにつなぎ合わせているということらしい。土偶を何に使ったのか、なぜ壊したのか、以前なぞだという。

西田泰民著<縄文文化における数の観念>面白いので紹介します。

◎数を把握する能力が、動物にも備わっているかどうかは昔から高い関心が寄せられている。<略>様々な実験、餌の多い少ないという量の把握は、ハトにもサル並みの数量の認知能力があるという。

☆そらあ、餌の多い少ないは彼らも瞬時にわかるが、3個ずつ等分になると大変だ。

◎世界の言語の中で、数詞はおおまかに5進法10進法で成り立っていることが多い。それは指の数らしい。アイヌ語では5・10・20は「片手」「両手」「全部」に対応している。4はたくさん、7は「10ひく3」。20以上は、「20の倍数」とか「20ひく5」と表現され、このような数詞は北方、アフリカなどに存在する。1,2の次は「たくさん」しかないという地域もある。

☆なにかで知ったことだけれど、アリやハチが、「えさが あちらにある」という仲間への伝達に、右回り左回りの回転をすとか、と聞いたことがある。これに数量や、どれぐらいの遠さなのか、どれぐらい時間がかかるのか、というような細かさどこまで入っているのか、興味があるねえ。衣食住の基本単語の次は、数字かな。

◎数字が表意という地域もある、数字に意味を持たせるという。1が「自己」2が「あなた」3が「社会との葛藤」4が「社会的モラル」5が「社会的完結」とか、3が「男」4が「女」という地域もある。

☆数字に意味を持たせるという考え方、方向には、ちょっと違和感を覚える。漢字以外は知らないが、それと日本での漢字しか知らないが、漢字は、表音と表意がある。先日、違和感を覚えたことは、「仏は 死者は 埋葬する」とあれば「フランスでは・・・」と解釈する。仏という感じがフランスなのか、亡くなった人なのか、文章の前後を読まなければわからない。

◎三内丸山遺跡から出土した土製品に棒で突いたような穴が並んでいる。この穴の並び方、穴の数、穴と線の組み合わせで何らかの意味を解こうとする方がおられる。アボリジニのメッセージステックという器具の例がある。メッセンジャーが携える覚書のような機能をはたしていた。いくつか傷をつけた棒を持参して口上を伝える。例えば、「私は5つ離れたキャンプにいる 10日後にここに来る 来るのは 3人だ」というように棒を見ながら言っていたようだが、最近までやっていたようだ。

☆三内丸山遺跡から出土した土製品の穴や線は、模様だと思っていたが、学者先生が「数詞としての意味」を疑問符をつけながら説いておられる。オレはこれは模様だと思うのだけでも。アボリジニの伝達棒にしても、本人が棒に刻んだ傷を見て、「本当に伝えなければならない 内容」を思い出さなければ意味がない、どこかの落語でありそうな話です。先生方は、もう一つ、土器に表された数、住居と数、を論じておられるが、これも読んでいて“?マーク”だ。例えば、土器の突起が「5」とか「7」という数字、例えば、住居の柱が、「6」とか「8」とかいう数字、これらを数多く集め統計を取っているが、結論が出ないようだ。

ストーンサークル<環状列石>石を円形に並べた構築物である。日本では現在40ヶ所が確認されている、大きいものは直径30~50Mになる。環状列石は数百年の期間、多大な労働力が投入されたモニュメントである。数百年という、親の3台も代も前から遠くから石を運んで積み上げたことになる。“大湯環状列石”では7K上流から5000個の石が運ばれた。1個20~30Kが平均的だが、重いものは150Kを超える。大湯環状列石では太陽の運行も取り入れられていた。夏至、冬至、日時計を表す組石があった。これは墓なのか、祭祀の場所なのか。イギリスロンドンより200Kにある有名なストーンヘンジは、5000年前~3000年前に作られたようだ。日本のもっとも古いストーンサークル(阿久遺跡)が作られたころ、B4500~B3000年エジプトで農耕牧畜が始まり、B2500年ギザの三大ピラミッドが建造された。

縄文時代、オレの人生がたかだか50年60年に比べ、1万年の時の長さはピンとこないというより、自然のありよう、山や川や海が自然にあるように、ヒトという生き物も蠢いていた、虫や鳥と同じように、食って寝て繁殖していた。虫や鳥と違うのは、仲間が亡くなって悲しい悔しい、夜の闇がやってくるとなんだか怖くてたまらない、頭の中から湧き出てくるモノ、なんだかわからないが恐ろしいモノ、そんなモノの存在を感じ震えて生きていたのかな。